
研究ノート

日英語会話における引用形式を用いた発話と相互行為
－解放的語用論に基づく引用研究の試み－

野村 佑子^{1)*}

【要 旨】

本研究は、日本語の会話に見られる引用を観察し、解放的語用論に基づいて再解釈することで、引用研究の発展に寄与する知見をもたらすことを目指す。解放的語用論とは、西欧言語を主な分析対象として提唱されてきた伝統的な語用論の枠組みから解放され、西欧言語以外の言語の現象も適切に理解するために母語話者視点で言語を分析することを提案する理論である（井出・藤井，2014）。本稿が焦点を当てる引用は、「ある場で成立した言葉や思考を、現在の語りの場に引いてくること」（鎌田，2000，p.17）であり、どの言語にも存在するものである。これまでの引用研究では、異言語での違いとして、文法的特徴に焦点が当たっており、日本語母語話者にとって引用するという行為が、英語母語話者のそれとどのように違うのかが注目されてこなかった。そこで、本稿では、日英語で比較可能な談話データを使用し、日本語に顕著に見られた「思う」を伴う引用に焦点を当てた分析結果を、「日本語の論理」（山口，2004）に基づいて再解釈することで、日本語話者にとっての引用とはどのような言語行為なのかを明らかにする。最後に、日本語の「思う」を伴う引用は、「その場で浮かんだ内容」を吐露することであることを示す。

キーワード：引用、相互行為、語用論、解放的語用論、日英対照

Research Notes

**Quotation in English and Japanese Interactions:
A Study of Quotation within the Scope of Emancipatory Pragmatics**

Yuko NOMURA^{1)*}

【Abstract】

The purpose of this paper is to offer an innovative new perspective on the study of quotation by reconsidering quotations in Japanese conversations through Emancipatory Pragmatics (EP). EP is an emerging paradigm which examines linguistic phenomena through the lens of native intuitions (Ide & Fujii, 2014). Because traditional pragmatics developed largely through the investigations of Euro-American languages, it is sometimes inadequate to more fully understand the dynamics of Asian languages. This paper applies EP to the study of quotation use in Japanese conversations as compared to quotation use in English. Previous studies of quotation primarily focused on grammatical differences and paid little attention to what it means to Japanese speakers to quote during conversation (in contrast to English speakers). Thus, this paper analyses quotations in English and Japanese conversations, with special attention to quotations with the verb *omou*/think. The results indicate that Japanese speakers tend to quote words that arise in their minds suddenly at a certain moment (e.g. interjection “he (Oh)”), whereas English speakers tend to quote well-considered words. Finally, the results suggest that Japanese quotations are sustained by “Japanese logics” (Yamaguchi, 2004) whereby Japanese sentences tend to be constructed in the word order in which they occurred in the speaker’s mind.

Key words: Quotation, Interaction, Pragmatics, Emancipatory pragmatics, Comparative study between English and Japanese

¹⁾ 順天堂大学・国際教養学部 (Email: y-nomura@juntendo.ac.jp)

* 責任者名：野村 佑子

[2020年9月29日原稿受付] [2020年11月27日掲載決定]

1. はじめに

語用論は、言語現象を、それが生じる場面にかかわる社会・文化的視点から研究する分野であり、ある話者が発することばが、その文脈で何を伝達するかといったことばの伝達機能を解明しようとするものである。1960年代から始まり、主に西欧言語の観察をもとにして構築されてきた理論だが、現在では世界の様々な言語の研究に用いられている。対象言語が多様になったことで、西欧的な概念に基づいて提案される枠組みをアジア言語など別系統の言語に当てはめると言語現象を十分に説明しきれないという指摘がなされるようになった(片岡・井出, 2002)。こうした問題意識は、語用論に多様な展開をもたらし、近年、「解放的語用論」(井出・藤井, 2014)と呼ばれる、伝統的な語用論を深化させる語用論の在り方が提案されている。本稿は、解放的語用論に立脚し、日本語会話における引用という言語現象について、英語会話におけるそれと比較対照させて特徴を明らかにするとともに、日本語の発想を西欧言語とは異なるものとして取り上げる「日本語の論理」(山口, 2004)を援用して再解釈することを試みるものである。これにより、これまで西欧言語を主な対象として研究してきた語用論からの知見では示されてこなかった、新たな引用の解釈が可能となることを示し、引用研究の発展に貢献する。

2. 先行研究

2.1 日英対照研究と解放的語用論

これまでの日英対照研究は、言語使用における日英語の異なりを指摘してきた。同一の状況に対しても、異なる言語形式を用いる傾向があることから、「スル」言語の英語と「ナル」言語の日本語(池上, 1981)、話者の視点が異なることを指摘して、状況の外の視点から語る英語、状況の内の視点から語る日本語(本多, 2009; 井出, 2006 他)などと特徴づけられてきた。また相互行為の違いとして、話者同士が

共感し共同的に会話を進める日本語は「共話」的であり、話者がそれぞれ自律的に語り合う英語は「対話」的であるという指摘もある(水谷, 1993)。また、Yamada (1997) は日本語では、聞き手の察しを重視するのに対し、英語では話し手が明確に伝えることを重視する傾向があった。これらの研究は、この二言語を対照させることで、日本語教育、英語教育、異文化理解等の発展に貢献し、異言語比較対照の重要性を示してきた。また、日英語・日英語による相互行為が根本的に異なる特徴を持つことを明らかにしたことにより、日本語を対象とする語用論研究に対し、欧米の言語文化を中心に発展した枠組みで日本語を解釈することで見落とす現象がある、あるいは日本語の言語現象を適切に解釈できない可能性を示唆している。こうした疑問に対し、井出・藤井(2014)は「解放的語用論」の必要性を唱える。解放的語用論は、これまで語用論において欧米の言語を主たるデータとして発展した理論(「王道とされる研究アプローチ、オーソドックスな研究アプローチ」(井出・藤井, 2014, p.10))からは解放され、言語の分析には母語話者視点を盛り込んでアプローチする研究をすることで、語用論のさらなる発展を目指すものである。研究対象とする言語が、母語話者視点から観察し、西欧言語と根本的な異なりがあると判断された場合に、伝統的な語用論で用いられてきた枠組みをそのまま用いるのではなく、対象言語の特性を説明するのに母語話者が納得できる枠組みを使うアプローチであり、これによりこれまで発見できなかった知見を示すことができるのである¹⁾。

2.2 引用研究²⁾

本研究が焦点を当てる引用の定義は「ある場で成立した言葉や思考を、現在の語りの場に引いてくること」(鎌田, 2000, p.17)であり、例えば「昨日、先生が必ず期限を守れて言ってくれたよ」、「忙しいのに、困ったな、と思って」などである。どの言語にも存在する現象である。

そして、その構造は図 1³⁾ に示すような入れ子構造となっている。

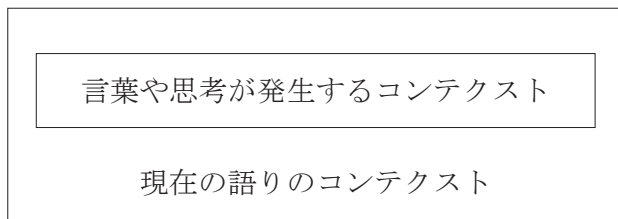


図 1. 引用の構造²⁾

例えば (1) の発話は、図 2 のようになる。

(1) 困ったな、と思って

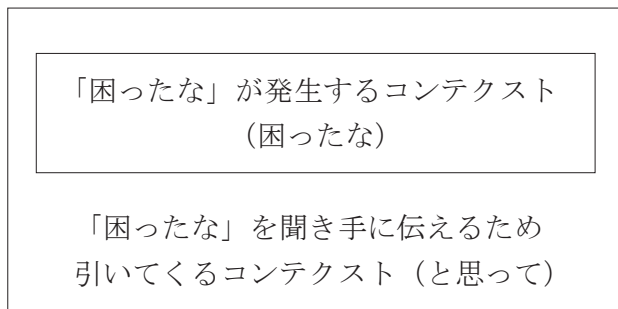


図 2. (1) の構造

「困ったな」という発話（思い）が生じるコンテキストが、「と思って」を伴って話者が引用するコンテキストを取り囲む構造である。つまり、引用は、一つの発話に二つのコンテキストが存在するという二重の構造を有しており、特殊な構造を持つ言語現象とされているのである（中園，2006）。

日本語の引用に関する研究は、その文法形式である「話法」の特徴を詳細に記述しており、例えば、中園（2006）は、直接話法、間接話法の大別が英語に比べ日本語のほうが緩やかであり、また直接話法から間接話法への転換時に起こるダイクシス⁴⁾の調整について、英語のほうが文法的制約が強く、日本語は機能的制約が強いという違いを明らかにしている。また、山口（2009）は「明晰な引用」が可能な英語と「しなやかな引用」が可能な日本語と特徴づけてい

る（山口，2009，p.137）。

話し言葉をデータとして、相互行為の中で使用される話法を分析した語用論的研究では、直接話法を会話中に用いると、臨場感が増し、語りが盛り上がる効果があることが指摘されている（Besnier, 1992; Brown & Levinson, 1987; Chafe, 1982; Clerk & Gerrig, 1990; Fujii, 2006; 甲田, 2015; 大津, 2005; Tannen, 1989 など）。これらの研究に共通するのは、直接話法、間接話法という西欧言語の文法カテゴリーを日本語に援用して説明している点である。確かに、日本語にも英語のような直接・間接に大別される形式も存在しているが、こうした分類で整理すると、日本語の引用とはどのようなものなのか、西欧言語のそれとは異なるのか、同じなのか、といった根本的な問題には特に注意が払われないことになる⁵⁾。

日英語の談話データを用いて相互行為の中の引用を対照させて研究する試みはほとんどないが、日英談話において日本語のほうが英語よりも引用が多用されることが明らかになっている（野村, 2007a; 2007b; 2015; 2018）。

2.3 引用研究の課題

前節で示した引用の定義にあるように、誰か（または自分）のこぼれや思いを、誰かに伝えるために引くという行為は、日常の中で絶えず行われる、ごく普通の行為であるが、言語ごとの違いは単に文法上の違いにとどまり、相互行為上の異言語間の違いに関する研究は進んでいない。つまり、引用の違いは結局のところ、元々の各言語の文法形式の問題であり、それ以外の異なりはないとされており、それぞれの話者が何の目的でどのような時に引用するのかに関する違いは見出さず、話者の相互行為としての引用についてはどの言語であっても同じだと考えられているため、先に示した先行研究以上の発見がない現状がある。今後、引用研究をさらに発展させる一つの方向として、本稿では引用を切り口に、相互行為を観察し、それぞれの母語

話者にとって引用がどのような行為なのかを明らかにすることを目指す。

3. 談話データ分析の試み

3.1 データ

本研究では、談話データである「ミスター・オー・コーパス」⁶⁾を使用する。このコーパスは、20～60代の女性の母語による言語行動をDVD録画、文字化したものである。話者の条件・データ収集の状況を統一することで、異言語・文化間の比較研究を可能にするコーパスデータであり、本研究が行う日英対照研究にも適したものと見える。なお、現在収集済みの言語は、日本語、英語、韓国語、中国語、アラビア語、タイ語であり、今後も拡大予定の多言語コーパスデータである。参加者は、いくつかのタスクを行ったが、本研究が扱うのは、会話(母語話者同士ペアで「びっくりしたこと」について約5分間語り合う)データ(日本語26会話、英語22会話)である。

3.2 分析対象と解釈枠組み

データの中から、2.2で述べた鎌田(2000)の定義に基づき、引用を用いた発話を抽出したところ、日本語244発話、英語132発話を得た(野村2007b)。ここでは、日本語244発話の中に多く見られた引用動詞「思う」を伴う発話に焦点を当て、それに類似する“think”を伴う英語の発話と比較する⁷⁾。抽出した発話を確認したところ、該当するものは、以下のような、日本語133発話、英語10発話である。

- (2) 「すごい昔の人だったんだ、私」て思った
(3) They think, “Oh, she’s Japanese.”

分析では、話者がこのような発話をした後、聞き手がどのように反応しているのかを明らかにするとともに、引用の発話について、山口(2004)が提唱する「日本語の論理」を援用して再解釈する。「日本語の論理」とは、文の構

築を「そのとき浮かんだ言葉を結ぶ」と考える言語観である。

3.3 日本語の事例

引用が用いられた箇所のやりとりで、日本語会話によく見られた事例を示す。日本語会話では、「思う」を伴う引用は、英語会話の“think”を伴う引用と比べて高頻度で観察された。

(4) その場で心に浮かんだ言葉を引用する

Lが、アルバイト先のカフェで、白い服を着た客が、ジュースのグラスのへりに添えられた一切れのオレンジを絞ろうとしたところを見た話をしている。

122 L そう、しかもさー、なんかこう、絞ったりとかさあ、しちゃうじゃん、やっぱり、こうやって

123 R うん

124 L 食べたりとかだったら、まだいいけど、こう、絞ってる人とか見ると

125 R {笑い}

126 L 「飛ばさないで、飛ばさないで」って
思う {笑い}

127 R {笑い} ねー、ほんと、白いもんね

話し手Lはその客の服にオレンジ果汁がついてしみになる可能性を心配したときの様子を説明している。126行目で、Lはその心配事を「飛ばさないで、飛ばさないで」という、願いを引用する形で語っている。これは語り手の心内を直接的にありのままに吐露するものであり、まさにその光景を目にしたとき、心に浮かぶ内容である。この引用付近では笑いも起こっており、盛り上がっている様子も観察される。先の研究にもあった、話法の効果である。引用の発話の後、聞き手であるRはLの引用の後に、127行目で「ねー」と同意を示す。そして更に「白いしね」と加えており、これは、Lが引用したLの心の中で生じた、「オレンジ果汁を飛ばさない

でほしい」という気持ちの根拠であり、この引用内容に直接言及するものである。ここに至るまでに、Lは一度も「客の服が白いので汚さないか心配になる」という内容は明言しない。RはLが体験したことを実際に体験したわけではないが、126行目の引用を受けて、Lの思いを鮮明に理解できるのである。つまり、126行目の「飛ばさないで、飛ばさないで、って思う」という発話は、聞き手Rの理解を誘発し、未体験の出来事に共感度の高い反応を示し、追体験したかのような相互行為を実現させるといえる。

(5) その場で浮かぶ感嘆の表現を引用する

Rはアルバイト先のカフェで見かけた女性の驚きの行動について説明している。

037 R フロアで

038 L ああ

039 R お客さん、ほかの

040 L あ

041 R なのにその、人、女の人なんだけどね、
歯、みがきながらすたすた歩いていったの

042 L え、なん、かつこは

043 R ふつう

044 L え、ちょっと、なに、その人{笑い}

045 R わかんない{笑い} からびっくりしちゃって

046 L {笑い} びっくりする

047 R {笑い} 目を疑った、自分の、「へ」と思って、「なんだ？」と思って

048 L {笑い} それはびっくりだよ

049 R {笑い} でもなんかそんなの注意できないから

050 L {笑い} だよ

話し手Rは女性がカフェの中を歩きながら歯を磨いており、Rはその女性の場にそぐわない行動に驚いたことを伝えている。47行目の「目を疑った」という発言で、すでに驚いたこ

とを明確に伝えたが、「思う」を伴う引用を用いて発話を続けている。そこでは、その場で浮かんだであろう「へ」、「なんだ？」という短い感嘆の表現が用いられている。まさに、その場でRの頭に浮かんだ内容であろう。これにより「目を疑った」という、びっくりした様子が具体的に示されたのである。先の例にもみられたように、引用の周辺では笑いが起こり、相互行為の中の盛り上がるの部分となっている。「へ」や「なんだ？」は、目の前の状況がこれまで想像したこともなかった状況であって、想定範囲を著しく逸脱したため、拍子抜けした様子を表現するものであり、その驚きが深刻なものや対応するため力の入った構えが必要となるような驚きではなく、力の抜けるような驚きであったことを表しているのである。さらに、「へ」という一文字の感嘆表現は、「思う」の対象とはなりにくく、「思う」を伴って引用されることは、意味上は不自然であり得るが、他にも『はっ』とか思って」など、数例見られた。このような具体的なびっくりの表現を受け、聞き手の方も、繰り返しながら、ともにびっくりした体験をするかのように、「びっくり」ということばを繰り返している。45行目で話題の説明は終了しているが、46行目以降で余韻のようなやりとりがあり、びっくりしたことが、より強く共有される相互行為である。

3.4 英語の事例

次に、英語に見られた事例を示す。

(6) 計画・予定を引用する

話し手Lが、庭にカラスの死骸を発見し、びっくりしたことについて語っている。

063 L And then, fell, into the garden...just.., fell down. So I thought, “okay, tomorrow I’ll call my landlord and say there’s a dead crow in the garden” {laugh}, right? But the next day the crow was gone. {laugh}

And s[o...

064 R [That's kind of eerie.

065 L Weird, yeah, but ah, about an hour after he fell I heard some crows in the garden ...one was really loud ...funny hoarse kind of voice, and the other one a very soft voice ...but you can tell the crowin ...the [cawing is different, right?

066 R [Hmm.

067 L Hmm, yeah.

63 行目で、話し手 L は、自宅の庭にカラスの死骸があることに気づき、次の日に大家さんに言いに行こうと思ったのに、なぜかその死骸が消えていて驚いたと語っている。この引用内容 “okay, tomorrow I’ll call my landlord and say there’s a dead crow in the garden (そうだ、明日大家さんに連絡して、庭に死んだカラスがいると伝えよう)” は、話し手の計画を具体的に説明するものである。日本語に見られたように、引用内容が、カラスの死骸を目撃した L の頭にその場で浮かんだ内容か否かは判断しかねるが、日本語ほど突発性を帯びない内容となっている。聞き手 R のリアクションは、“eerie (不気味)” であるという、話し手の話題全体を形容詞で評価するものであり、“Weird (奇妙だ)” や “yeah” と返していることから、言い当てた評価をしたと考えられ、互いに理解しあっており、相互行為上の齟齬は見えない。しかし、日本語会話に見られたように、引用内容に直接言及するならば、L がカラスの死骸を見て、次の日に大家さんに言いに行こうという考えにたったことに共感する発話が続くはずであるが、そのような展開にはなっていない。したがって、聞き手 R は、追体験したかのように共感するというよりも、L の話題に対し、客観的視点から判断してその出来事が “eerie (不気味)” と評価しており、L がびっくりしたことに R が共感するのは異なる相互行為である。“Eerie (不気味)” という形容詞を選択し、より客観的

な視点でコメントを与えていることから、共感というよりも、正確な理解を示し、自ら適切な語彙を選んで反応を示した形である。

3.5 分析のまとめ

日英語会話における「思う」または “think” を伴う引用とその周辺部で起こる相互行為を観察すると異なる現象が観察される。日本語会話においては、話者の頭に突発的にその場で浮かんだことばがそのまま引用され、聞き手はその引用内容に対し、共感度の高い反応を示して相互行為が展開する。その一方、英語会話においては、話者は日本語ほど突発性がなく、聞き手の反応も引用内容にはなく、話題全体に対する反応を示す形で相互行為が進行する。

両言語ともに、引用内容を現在の語りのコンテキストに引いてくるという発話であることは共通しているものの、引用内容やその発話を受けた聞き手の反応は異なっているようである。

4. 「日本語の論理」から見る日本語の引用とは？

本稿が扱ったデータで、参加者は「びっくりしたこと」を語り合っているが、日本語会話では、話し手は「思う」を伴う引用を多用しながら、具体的にどのようにびっくりしたのかを鮮明に語り、また聞き手もその具体的な描写により、共感度の高い反応を示すことがわかった。このような相互行為の在り方を支えるのは何だろうか。

山口 (2004) によれば、日本語における文構築はその時に頭に浮かんだ内容を結ぶことだという。そこには、事態を客体化して、誰が何をするのかを明らかにしたうえで、動作主を主語として立て、その形式と一致した動詞を後続させる、といった英語と同様の発想がない。その場で思うことを、誰が何をするかを明確にせず、吐露していく語り方である。

引用の構造に立ち返ると、入れ子構造の内側が、異なる性質であることがわかる。

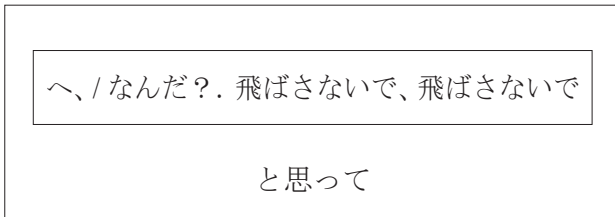


図 3. 日本語の例

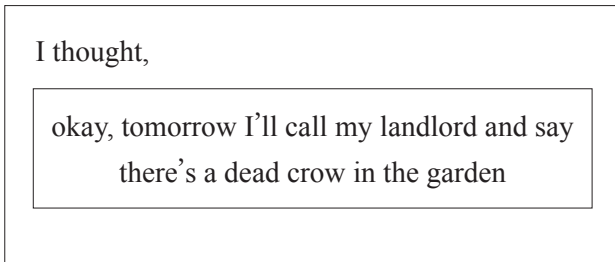


図 4. 英語の例

つまり、日本語会話においては、本データのテーマであった「びっくりしたこと」を語るときに、話し手は「思う」を使って、びっくりした経験をした場で突発的に生じることを引用しながら、聞き手の共感を誘発しつつ相互行為を進める傾向があり、それはまさに山口（2004）が主張する「日本語の論理」に基づく語り方である。

このような日本語の引用を、語用論の中で解釈するならば、これまでの研究と同様、臨場感を出したり、盛り上がりたりする効果がある、あるいは話し手の体験を鮮明に描く、という発見に留まるだろう。しかし、解放的語用論に基づき、日本語の論理をもって再解釈することで、あまり英語には見られない、「へ」「なんだ」のような突発的な、話者の心内で発せられた発話の引用の存在が浮き彫りになり、引用研究において、引用内容へも着目することの意義があることも明らかとなる。

5. おわりに

本稿では、日本語の会話データにおける引用について、英語会話との比較において特徴を明らかにし、「日本語の論理」に基づいて再解釈した。日本語の引用は、その場で起こる突発的

な発話を現在の発話に引く行為であり、その結果、日本語母語話者にとって、本データの「びっくりしたこと」を語りあう相互行為は、話し手がそのびっくりした有り様を鮮明に語り、聞き手が共感するものであることがわかった。

日本語の引用研究は、これまで西欧言語の記述にある直接話法・間接話法の大別を前提に進められているが、解放的語用論に立脚し、相互行為の中に見る引用を観察して、日本語が持つ言語観に基づいて再解釈してみると、西欧言語の引用とは異なる性質を帯びていることがわかる。本稿では、限られたデータを資料とし、限られた現象を観察したが、今後、「思う」「think」以外の引用形式を整理し、また多様な文脈での引用に関する調査を進めたい。

註

- 1) 例えば、藤井（2020）は日本語の主語がたびたび省略されると解釈することは、西欧語の立場からの解釈であり、日本語の立場からすると、「省略」とは呼べないことを主張している。
- 2) 「引用」とは発話行為をさし、その文形式を「話法」と呼ぶ。
- 3) 図 1、図 2 は、中園（2006）を参考にして、著者が作成した図である。
- 4) 直示表現を指す。this、that、これ、それ、などコンテキストを参照して初めて指示された対象が分かる語である。ダイクシスの調整とは、例えば、英語の直接引用形式である、Tom said, “I’m hungry.” の引用符内の “I” が、間接引用形式である、Tom said that he was hungry. の that 節内で “he” に変換することである。
- 5) 鎌田（2000）や山口（2009）など、日英語の引用に関して詳細に記述した研究では、直接・間接の大別について、日英語では異なることを指摘し、日本語のほうが中間的な形式が多様であることを指摘している。
- 6) ミスター・オー・コーパスは、以下により

収集された。「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」(平成15～17年度科研基盤研究B, 課題番号15320054, 代表:井出祥子), 『母語話者視点』に基づく解放的語用論の展開: 諸言語の談話データの分析を通じて」(平成20～21年度科研基盤研究B, 課題番号20320064, 代表:藤井洋子), 「社会・文化的場の共創と言語使用: 母語話者視点による語用論理論の構築」(平成23～25年度科研基盤研究B, 課題番号23320090, 代表:藤井洋子)

- 7) 日本語「思う」と英語“think”の出現回数が、大きく異なることから、同等のものとして比較することが適切かは議論の余地があるが、ここでは、その使用法が類似していたことから、比較することとした。適切性については、今後の課題としたい。
- 8) 文字化表記法
 - / - 長音
 … ポーズ (短)
 , / . / 。 ポーズ (長)
 = ラッチング
 [オーバーラップ
 {笑い} {laugh} 話者の笑い
 xxx 聞き取ることができなかった音

付記

本稿は、2020年2月22日、日英言語文化学会第74回定例研究会(於順天堂大学)において発表した「日英語会話に見られる引用の特徴-日本語母語話者の英語学習に役立つ日英対照研究を目指して-」に、大幅に加筆・修正を加えたものである。

引用文献

Besnier, N. (1992). Reported speech and affect on Nukulaelae Atoll. In J.H.Hill & J.Irvin (Eds.), *Responsibility and evidence in oral discourse*, (pp.161-181). Cambridge, MA: Cambridge

University Press.

Brown, P., & Levinson, S.C. (1987 [1978]). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.

Chafe, W. L. (1982). Integration and involvement in speaking, writing, and oral literature. In Tannen, D (Ed.), *Spoken and written language*, (pp. 35-53). Norwood, NJ: Ablex Publishing Cooperation.

Clerk, H. H., & Gerrig, R.J. (1990). Quotation as demonstrations, *Language* 66 (4), 764-805.

Fujii, S. (2006). Quoted thought and speech using the mitai-na 'be like' noun-modifying construction. In Suzuki, S (Ed.), *Emotive communication in Japanese*, (pp.53-95). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

藤井洋子 (2020). 「日本語の『場』志向性と述語主義を考える-英語との比較から-」井出祥子・藤井洋子 (編) 『場とことばの諸相』 (pp.61-103). ひつじ書房.

本多啓 (2009). 「他者理解における『内』と『外』」. 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編) 『『内』と『外』の言語学』 (pp. 395-422). 開拓社.

井出祥子・片岡邦好 (編) (2002). 『文化・インターアクション・言語』 ひつじ書房.

井出祥子 (2006). 『わきまへの語用論』 大修館書店.

井出祥子・藤井洋子 (編) (2014). 『解放的語用論への挑戦』 くろしお出版.

池上嘉彦 (2006). 『英語の感覚, 日本語の感覚』. NHK ブックス.

鎌田修 (2000). 『日本語の引用』 ひつじ書房.

甲田直美 (2015). 「語りの達成における思考・発話の提示」 『社会言語科学』 第17巻, 第2号, 1-16頁.

水谷信子 (1993). 「『共話』から『対話』へ」 『日本語学』 第12巻, 第4号, 4-10頁.

中園篤典 (2006). 『発話行為的引用論の試み-引用されたダイクシスの考察-』 ひつじ書

- 房.
- 野村佑子 (2007a). 「語り手は何に注目するのか? — 引用から見る日米語ナラティブ」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第13号, 83-93頁.
- 野村佑子 (2007b). 「日米語の会話: 引用からの一考察」『日本エドワードサピア協会研究年報』第21号, 39-49頁.
- 野村佑子 (2015). 「言語化の対象に関する日英語対照研究—心内状況描写に着目した分析からの一考察—」『言語と人間』研究会6月例会配布資料.
- 野村佑子 (2018). 「日英語会話における思考動詞を用いた引用について」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第24号, 105-115頁.
- 大津友美 (2005). 「親しい友人同士の雑談におけるナラティブ—創作ダイアログによるドラマ作りに注目して—」『社会言語科学』第8巻, 第1号, 194-204頁.
- Tannen, D. (1989). *Talking voices*. Cambridge MA: Cambridge University Press.
- Yamada, H. (1997). *Different games, different rules*. Oxford: Oxford University Press.
- 山口秋穂 (2004). 『日本語の論理』大修館.
- 山口治彦 (2009). 『明晰な引用、しなやかな引用』くろしお出版.